

井上直樹著

『帝国日本と〈満鮮史〉』

——大陸政策と朝鮮・満州認識——

(増選書 116)

高志書院 二〇一三・一刊

四六 二六〇頁 二五〇〇円

〈満鮮史〉という言葉は、いかにも古めかしい印象を与える。しかし、戦前日本の東洋史学においては、政府および軍の大陸政策と深い関係を持ちつつ、非常に重視されていた研究領域であった。本書は、その史学史的な省察を正面からおこなっている。

第一章の冒頭では、高句麗史は中国史に属するのか、韓国史・朝鮮史に属するのかという論争をふり返ることで、問題の所在を示そうとした。中国史のなかに高句麗を位置づけようとする中国の研究動向に対して、二〇〇三～〇四年には高句麗を韓国史とみる韓国の輿論が激しく反撥した。このような対立が生じた背景の一つは、高句麗の活動した領域が、現在の中国と北朝鮮・韓国にまたがっていることにあった。これに対して「朝鮮と満州を一つの歴史的空間とする満鮮史では、そのような問題はひとまず解消されてしまうのである」(三三頁)。「今日の歴史学においても複数の国家にまたがる地域を一つの考察対象とすることもないわけではないが、中国東北地方と朝鮮半島の歴史は現在の国境・民族を

一つの規準として、中国史、朝鮮史あるいは韓国史として論じられ、満鮮史として考究されることはない。ここが満鮮史の現在の歴史学と大きく異なるところである」(同前)。

旗田巍など戦後の歴史家は、満鮮史が日本の大陸経営と関連して構想されていたことを厳しく批判した。しかし、満鮮史が形成された歴史的状况には、さらに詳細に考察すべき余地があると、本書の課題を提示している。

第二章からは、とくに白鳥庫吉や稲葉君山による満鮮をめぐる発言を、時代状況のなかで丁寧に読み解いていく。満鮮史研究は、日本の大陸経営に提言をおこなおうとする意図から熱心に取り組み、しかも個々の時期に即した論点が提出されていったことが、本書によって明瞭に示された。たとえば、稲葉君山の「満韓不可分論」は、朝鮮半島の統治を盤石にするためには遼東半島をあわせて支配することが必要であることを、高句麗の経験も踏まえて説くもので、日露戦後の状況に対応しようとする言説であったという指摘は、重要であろう。また、『後藤新平文書』のなかから白鳥庫吉の調査報告を見出したほか、これまであまり利用されてこなかった雑誌記事を紹介したことも注目される。

満鮮史に対する著者の立場は、高句麗研究をおこなおうとする立場から、史学史を通じて意味のある示唆を得ようとするものである。著者は、むしろ満鮮史を復活させようとするわけではないが、高麗史研究には、現在の国家・民族にとられない視野が不可欠であるとして、それを「東北アジア史的視座」と呼んでいる。

そして「高句麗史帰属問題に象徴されるような近代歴史学のあり方そのものを再検討し、新たな歴史像を示していく必要がある」（二四一頁）とも指摘した。

私が本書を通じて認識を新たにできたのは、なぜ戦前の満鮮史において、あれほど歴史地理の研究が重視されたのかという理由である。端的にそれは地政学への関心からなのであった。このことは、すでに自分としては何となくわかってはいたのだが、本書に引用された稲葉の言葉が露骨にそれを語っていたことから、はつきりと了解するに至った。

歴史地理研究と一定の関連をもちつつ、戦前の満鮮史ないし東洋史学が重んじていたもう一つの主題は、民族と国家の起源への探究であろう。個々の古代国家はいかなる民族によって建てられたのかということについて、かつての東洋史学は異常なほど強い関心を示していた。このような民族性への関心は近代歴史学としての東洋史学の性格をよく示している。そして、民族性への強い関心は、例えば韓国・朝鮮の近代ナショナリズムと複雑な共存ないし矛盾の関係にあったと思われる。そう考えてみると、今後の歴史学にとって古代の「民族」を分析することには意味があるのかどうか、またそれは可能なのか。著者に問いかけてみたい点である。

（吉澤誠一郎）